

幸田 文

台所の  
おと

# 台所の

おと

幸田 文

講談社

## 台所のおと

一九九二年九月二八日 第一刷発行  
一九九二年二月一〇日 第三刷発行

著者——幸田文

©幸田文 1992, Printed in Japan



発行者——野間佐和子

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽一三三 郵便番号一三〇

電話

文芸図書第一出版部(〇三)五三九五—三三〇四  
書籍第一販売部(〇三)五三九五—三六二一  
書籍製作部(〇三)五三九五—三六一五

印刷所——信毎書籍印刷株式会社 製本所——株式会社黒岩大光堂

定価はカバーに表示してあります。

本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。

送料小社負担にてお取り替えます。

なお、この本についてのお問い合わせは文芸局文芸図書第一出版部宛にお願いいたします。

## 目次

台所のおと

7

濃紺

55

草履

65

雪もち

79

食欲

95

祝  
辞

135

呼  
ば  
れ  
る

173

お  
き  
み  
や  
げ

203

ひ  
と  
り  
暮  
し

223

あ  
と  
で  
の  
話

245

装幀

大泉 拓

カバー写真撮影

江頭 徹

〈講談社写真部〉

台所のおと

幸田文作品集



# 台所のおと



佐吉は寝勝手をかえて、仰向きを横むきにしたが、首だけを少しよじって、下側になるほうの耳を枕からよけるようにした。台所のものを音をきいていたいのだった。

台所で、いま何が、どういう順序で支度されているか、佐吉はその音を追っていたい。台所と佐吉の病床とは障子一枚なのだから、きき耳たてるほどにしくなくても、音はみな通ってくる。けれどもそこで仕事をしているのがあき一人きりのときは、聞く気で聞いていなければ、佐吉の耳は外されてしまう。あきはもとから静かな台所をする女だが、この頃はこゝとに静かで、ほんとに小さい音しかたてない。いまも手伝いの初子を使いに出した様子だから、あき一人である。女房のたてる静かな音を追っていると、佐吉は自分が台所へ出て仕事をしているような気持になれる。すると慰められるのだった。

痛みや苦しみがあまりない、ぶらぶら病気を病んでいれば、実際手持ぶさたなのだ。だから、身は横にしている、気持ちがそれからそれへと働いていけばうれいのである。こんなに寝込んでしまうつい一カ月前までは、ずっと自分が主人でやってきた、手慣れた台所仕事なのだ。目に見ずとも音をきいているだけで、何がどう料られていくか、手に取るようにわかるし、わかるということはつまり、自分が本当に庖丁をとり、さい箸を持って働いているに等しいのだった。週刊誌もくたびれるし、ラジオも自分の好みのものをいつも必ず放送しているわけではないし、なによりもいちばん病む心憂さの晴れるのは、台所の音をきくことだった。

しゃあっ、と水の音がしだした。いつも水はいきなり出る。水栓をひねる音はきこえないのである。しかし佐吉は、水が出だすと同時に、水栓から引込められるあきの手つきをおもいうかべることができる。そんな手つきなど今迄に注意しておぼえたことはないのだけれど、しょっちゅう見て目の中に入っていたのかとおもう。あきは中指と親指だけをかけ、あとの三本は頑固なように結んで、水栓を扱うくせがある。

水栓はみんな開けていず、半開だろうとおもう。そういう水音だ。受けているのはいつも使っている洗桶。最初に水をはじいた音が、ステンレスの洗桶以外のものではなかった。水

はまだ出しつづけになっている。きつと桶いっぱいに汲む気だろう。水の音だけがしていて、あきからは何の音もたつてこない。が、佐吉には見当がついている。なにか葉のものの下ごしらえ——みつばとかほうれんそう、京菜といった葉ものの、枯れやいたみを丹念にとりのける仕事をしているにちがいない。その仕事は、障子の仕切りを越して聞えてくるほどの音は立てないから、あきから何のものの音もきこえてこないのだ。葉ものごしらえをしているとすれば、もうじき水は止められる筈だ。なぜなら葉ものの洗いは、桶いっぱいに張った水へ、先ずずつぷりと、暫時つけておいてからなのだ。浸しておくあいだは、呼吸を十も数えるほどでいいのだが、その僅かのひまも水の出しっぱなしはしないこと、というのが佐吉のやりかたで、佐吉は自分の下働きをしてくれるひと誰でもに、その方式をかたくまもらせていた。無論あきがその手順を崩したことはないし、決して無駄水を流すような未熟なまねはしなかった。だから、桶はもうじきいっぱいになるし、そこで水音がとまれば、あきが葉ものごしらえにかかっている、という見当づけは多分あたるのだが——やはり水はとめられた。あきは棚のほうへ移ってなにかしている気配で、やがてまた流し元へもどると、今度は水栓全開の流れ水にして、菜を洗いあげている。佐吉はその水音で、それがみつばでなく京菜でなく、ほうれんそうであり、分量は小束が一把でなく、二把だとはかって、ほっとする安らぎと疲れを感じる。

「きょうはどこだっけな？」

「小此木さん三人の、小部屋のほうは塚本さんだけど。」

「気をつけろよ。小此木さんはちよびり文句屋だ。」

「ええ——そりゃそうと、あなた気がつきませんか？　うちの初子、塚本さんとこの上田さんに気があるらしいんだけど、あたしはどうも上田さんてひと、虫が好かなくてねえ。」

「うむ。でもまあ、初子が虫が好くのなら仕方もないしな。どうかあつたていうのか？」  
「いえいえ、そんなのじゃない。まだ、初子の気が浮いてるようだ、というだけの私のカンなのよ。形になんかなってるものではないとおもうわ。」

うわさの初子が帰ってきた。初子ひとりが入ってきただけに、なんとなくあたりに賑やかさが出る。賑やかというより、ざわつきといったほうがいいだろうか。騒々しい娘ではないのだが、若いからどこことなくざわつきがからだについている。佐吉は今迄初子を静かな娘だと思っていたのだが、病んでからよく見てみると、それほど静かではなくて、やはり結構ざわつきを発散していると気づいた。若さのせいだとおもう。若さというのは、いつでもすぐ今以上に、騒ぎだせる下地があることかなあ、などと自分の若い頃も思い出させられたのであり、初子の若いざわつきが病気の癪にさわるとき、叱言を我慢してやったりしているのである。初子が上田を好いているらしいというのは、さっきあきに聞いてはじめて知った

ことだが、恋ごろなどがあつては、大ざわつきを振りまいて歩いているのと同じだから、病人のおれがうとうとして感じるのは当り前か、と苦笑がでる。

佐吉の病氣は、去年の秋からだ。秋はやくに風邪をひいた。売薬一瓶を何錠かあましてなおったが、あとにへんな疲労感があつてとれなかった。本病の風邪はさしたことがなくて、病みづかれのほうがつこく停滞し、けだるがった。根氣が減り、顔色が沈んでしまい、食事がすすまず、痩せた。夏の暑さまけを持ち越しているのだ、と自分ではいつていた。ちょうど店の忙しくなる時季だったから、休んでもいられず、市場へは毎日買出しにいった。こたえるらしかった。仲間が、ついでに仕入れしてきてやる、といったが佐吉はでかけた。その瘦我慢はたたたとおもう。正月の小豆がゆから床についた。その時やっと医者へいった。医者は胃だと診断した。食事の制限が命じられ、東大あたりでよく検査してもらえといわれた。

なか川、という小さい料理家を、あきと初子を助手に、やっていた。姓からとった屋号だった。客室は八畳と四畳半の二の間。五人か、詰めて六人しか客はとれないが、それで丁度いいのだった。戦後すぐに建った、バラック住宅のひどいものなのだが、安く買って安い手入れをして、体裁よく住み、都合よくした。だから家のまん中の床ゆかをとおして台所にし、台

所の両側へ茶の間と奥の四疊半を一行におき、廊下をはさんで八疊とはばかりという間取りである。まわりは中小のメリヤスや木綿品の問屋が多く、少しはなれたところにはいい料亭も並んでいるが、なか川はなか川で重宝がられている。けちなうちだが、家より佐吉の味のほうがずっと上なので、そこが気に入られていた。佐吉は承知していて、どの客へも自分の神経を使った料理を出した。そして、病んでつくづく思うのは、自分は食べものをこしらえる他には用のない男で、それをしている限りは手持ぶさはなかったし、慰められていた、ということだった。海老もみつばもいじれなくなった手持ぶさは、ほんとにやり切れない。あきと初子が店を休まずに続けている、せめてそのもの音だけでもきいて、自分もそこに立ち働いている気になれば、いちばん心憂さがしのげるのだった。

それにしてもあきは、ほんとに静かな音しかたてなかった。その音も決してきつい音はたてない。瀬戸ものをタイルに置いて、おとなしい音をさせた。なにやら紙をかさかさいわせることもあるし、あちこち歩きまわりもするが、それがみな角を消した面取りみたいな、柔かい音だ。こんなにしなやかな指先をもっているとは思わなかった。いつの間にか自分の教導がきいていて、おそろしいものだ、これほど上達したにちがいない、と佐吉はおもう。

あきは佐吉と二十歳も年齢のひらきがあり、互に何度目かの妻であり夫である。終戦の荒